

各関係機関の長
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター 所長

平成 1 8 年度病害虫発生予報第 1 号について
平成 1 8 年度病害虫発生予報第 1 号を発表したので送付します。

平成 1 8 年度病害虫発生予報第 1 号
向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。
発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	記載ページ
早期水稲	葉いもち イネミズソウムシ スクミリンゴガイ	並 並 並	2 2 2
冬春きゅうり (半促成)	べと病 うどんこ病 褐斑病 ミナミキイロアザミウマ	やや少 やや少 並 やや少	2 2 3 3
冬春ピーマン	うどんこ病 ミナミキイロアザミウマ ヒラズハナアザミウマ コナジラミ類 黒枯病(仮称)	多 やや多 並	3 3 3 3 3
冬春トマト	葉かび病 灰色かび病 コナジラミ類 トマト黄化葉巻病(TYLCV)	多 やや多 やや多	4 4 4 4
野菜・工芸作物全般	アブラムシ類 ハスモンヨトウ	並 並	4 4
かんきつ	そうか病 かいよう病 灰色かび病 ミカンハダニ	並 やや多 やや少	5 5 5 5
果樹共通	カメムシ類		5
茶	炭疽病 カンザワハダニ チャノコカクモンハマキ チャノハマキ チャノミドリヒメヨコバイ チャノキイロアザミウマ ツマゲロアオカスミカメ クワシロカイガラムシ	やや少 並 並 並 やや多 やや多 やや多 多	5 6 6 6 6 6 6 6

作物の生育状況(4月中旬)

早期水稲は日照不足、強風など天候不順の影響により葉令・分けつともにやや遅れた。冬春きゅうり・冬春ピーマン・冬春トマトは収穫期、かんきつは新梢伸長期、茶は萌芽期～発芽展開期であった。

5月の気象予報

天気は数日の周期で変わり、気温は平年並、降水量は平年並が多い、日照時間は平年並の見込みである。(1か月予報 鹿児島地方気象台 4 / 2 1 発表)

発生予報の根拠および防除対策

早期水稲

1 葉いもち（並）

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の稲の草丈・葉令は平年並である。
- 2) 5月の気温は平年並、降水量は平年並が多いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 補植用の取り置き苗は、葉いもちが発生しやすく伝染源になるので、補植が終わったら速やかに処分する。
- 2) 曇雨天が続く場合はあらかじめ粒剤を施用するか、または葉いもちの早期発見に努め、病斑が認められたら直ちに粉剤または液剤で防除する。
- 3) 同一系統の薬剤の連用は、薬剤耐性菌が発生しやすいので避ける。

2 イネミズソウムシ（並）

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率34.2%（平年51.0%）及び百株当たり成虫数3.3頭（平年4.1頭）はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 成虫が10株当たり5頭以上のほ場では、粒剤の水面施用を行う。水面施用に当たっては水管理に十分注意し、水深が3cm程度になるように調整し、少なくとも4日間はかけ流しや落水はしない。

3 スクミリンゴガイ（並）

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率10.6%（平年12.7%）及びm²当たり貝数0.3頭（平年0.4頭）はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 水田の入排水口には金網を張り、貝の侵入を防止する。
- 2) 貝の生息数が多い場合は、捕殺するか粒剤の水面施用を行う。
- 3) 粒剤の水面施用に際しては水管理に十分注意し、水深が3cm程度になるように調整し、少なくとも4日間はかけ流し、落水はしない。

冬春きゅうり（半促成）

1 ベと病（やや少）

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率42.9%（平年71.8%）は平年よりやや少、発病葉率1.3%（平年16.0%）は平年より少ない。

[防除上の注意]

- 1) ハウス内の換気を良くし、高温多湿にならないように注意する。
- 2) 肥料切れや成り疲れによる草勢の衰えは発生を助長するので、適切な肥培管理に努める。

2 うどんこ病（やや少）

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率14.3%（平年26.0%）は平年より少、発病葉率0.1%（平年4.6%）は平年よりやや少である。

[防除上の注意]

- 1) 整枝・誘引・老化葉の摘葉等を行い、採光・通風を良くする。
- 2) 耐性菌の発達を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤を輪番で使用する。

3 褐斑病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率42.9%(平年29.7%)、発病葉率1.7%(平年4.3%)はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、初期防除を徹底する。
- 2) 窒素質肥料の多用は発病を助長し、過繁茂になって通風を妨げるので適正な肥培管理に努める。

4 ミナミキイロアザミウマ (やや少)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率0.0%(平年18.3%)、1葉あたり成虫数0.00頭(平年0.34頭)はいずれも平年よりやや少である。

[防除上の注意]

- 1) 収穫の終わった発生ハウスは太陽熱利用による蒸し込み等を行って死滅させる。

冬春ピ - マン

4月中旬の巡回調査では灰色かび病の発生が多数認められた。(発生面積率30.8%(平年3.6%))。腐敗果の発生要因となるので十分な注意が必要である。

1 うどんこ病 (多)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率は76.9%(平年44.5%)、発病葉率15.2%(平年5.6%)はいずれも平年より多である。

[防除上の注意]

- 1) ハウス内の換気を良くし、高温にならないように注意する。
- 2) 茎葉が過繁茂にならないように整枝を行い、発病葉は除去する。

2 ミナミキイロアザミウマ (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率61.5%(平年33.4%)は平年より多、10花当たり虫数0.92頭(平年1.58頭)は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 本虫は薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤を輪番で使用する。

3 ヒラズハナアザミウマ (並)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率23.1%(平年34.4%)、10花当たり虫数3.2頭(平年5.2頭)は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 本虫の薬剤感受性はミナミキイロアザミウマとは異なるので、薬剤の選定には注意する。

4 コナジラミ類 (タハ'コナジ'ラミ ハ'イオタイ'Q) (-)

[防除上の注意]

- 1) 4月中旬の巡回調査では発生未確認であるが、気温の上昇とともに発生が多くなるので早期発見に努める。
- 2) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度のうちに防除する。

5 黒枯病(仮称) (-)

[防除上の注意]

- 1) 4月中旬の巡回調査では発生未確認であるが、高温、多湿条件で発生しやすいので換気等に注意し、早期発見に努める。
- 3) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、発病を確認したら早めに防除する。

冬春トマト

1 葉かび病 (多)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率30.8%(平成17.8%)は平成よりやや多、発病葉率12.5%(平成3.9%)は平成より多である。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- 2) 発病初期の防除を徹底する。

2 灰色かび病 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率38.5%(平成29.0%)は平成並、発病果率2.9%(平成1.2%)は平成より多である。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- 2) 発病初期の防除を徹底する。

3 コナジラミ類(シルバーリーフコナジラミ、タバココナジラミ バイオタイプQ) (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率23.1%(平成5.1%)は平成より多、100葉当たり虫数0.4頭(平成1.7頭)は平成並である。

[防除上の注意]

- 1) 気温の上昇とともに発生が多くなるので早期発見に努める。
- 2) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度のうちに防除する。
- 3) 施設栽培では防虫ネットを必ず設置するとともに、光反射マルチや近紫外線カットフィルム、黄色粘着板等の物理的防除手段を利用する。
- 4) シルバーリーフコナジラミとタバココナジラミ バイオタイプQの形態上の差異は成虫、幼虫ともに確認されておらず、両種の肉眼での区別は困難である。
- 5) タバココナジラミ バイオタイプQに効果のある殺虫剤が少ないことから、薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行う。
- 6) 有効な薬剤に対する抵抗性の発達を回避する観点からも同一薬剤の連用は極力行わず、より一層ローテーション散布を心がける。また、抵抗性発達の可能性が低いポタニガード乳剤等の微生物農薬や粘着くん液剤等のコナジラミを物理的に窒息死させる薬剤を防除体系に組み込む。

4 トマト黄化葉巻病(TYLCV) (-)

[防除上の注意]

- 1) 黄色粘着トラップ等を設置し、コナジラミ類(媒介虫)の早期発見に努めるとともに、栽培期間中を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。
- 2) 栽培終了後はコナジラミ類を防除後に株を抜き取り、10日間程度施設を密閉して本虫を死滅させた後、残さを処分する。
- 3) ハウスの周辺雑草は休閑期のコナジラミ類の生息場所となり、次作への伝染源となるので除草を徹底する。また、ほ場周辺に持ち出したトマト残さ及び野良生えのトマト等には特に注意する。

野菜、工芸作物全般

1 アブラムシ類 (並)

[予報の根拠]

- 1) 黄色水盤トラップによる有翅虫誘殺数(佐土原町)は、平成並である。

2 ハスモンヨトウ (並)

[予報の根拠]

- 1) フェロモントラップによる誘殺数(西都市、都城市)は、平成並である。

かんきつ

1 そうか病（並）

[予報の根拠]

- 1) 3月中旬の越冬葉調査では、発生が認められなかった。
- 2) 4月中旬の新葉調査では、発生を認めていない。
- 3) 5月の降水量は平年並が多いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 防除適期は萌芽期・落弁期・幼果期である。

2 かいよう病（やや多）

[予報の根拠]

- 1) 3月中旬の越冬葉調査における（全体の）発生面積率35.0%（平年15.7%）
発病葉率8.8%（平年3.3%）は平年並である。また、中晩柑類では発生面積率
100.0%（平年20.0%）は平年より多、発病葉率9.0%（平年3.7%）は
平年並である。
- 2) 4月中旬の新葉調査では、発生を認めていない。
- 3) 5月の降水量は平年並が多いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 防除適期は開花直前、落花後、梅雨期、秋芽生育期である。

3 灰色かび病（-）

[防除上の注意]

- 1) 防除適期は落弁期～幼果期である
- 2) 幼果表面に付着した発病花卉から幼果に伝染するので、枝をゆするなどしてできるだけ花卉の離脱を促す。

4 ミカンハダニ（やや少）

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率15.0%（平年26.3%）寄生葉率2.4%（平年5.7%）はいずれも平年よりやや少である。

[防除上の注意]

- 1) 生息密度が高くなると防除が困難になるので、寄生葉率30%（1葉当たり虫数0.5～1頭）を目安に防除を行う。

果樹共通

1 カメムシ類（-）

[防除上の注意]

- 1) 予察灯や一部の果樹園（佐土原町）で早期の飛来が確認されている。急に発生が多くなる恐れはないと考えられるが、局所的に発生する場合も考えられるので、ウメやモモなどの結実中の果樹類では飛来に注意し、初期防除を徹底する。

茶

1 炭疽病（やや少）

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率7.7%（平年26.0%）は平年よりやや少、 m^2 当たり病葉数0.5葉（平年0.5葉）は平年並である。
- 2) 5月の降水量は平年並が多いと予想されている。

2 カンザワハダニ (並)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率30.8%(平年48.0%)は平年よりやや少、寄生葉率4.0%(平年6.5%)は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 同一薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のロ - テ - ション散布を実施する。
- 2) 合ピレ剤の春季使用はリサ - ジェンスが発生しやすいので注意する。

3 チャノコカクモンハマキ (並)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の巡回調査では発生を認めていない。

[防除上の注意]

- 1) フェロモントラップによる誘殺状況では、都城では4月3～4半旬が発蛾最盛期であったと考えられる。
- 2) 顆粒病ウイルスによる防除適期は、第1世代に対しては越冬世代の発蛾最盛期の17日後、第2世代に対しては第1世代の発蛾最盛期の10日後である。
- 3) 本年は防除適期が一番茶の時期と重なり、適期防除が困難であると考えられるので第2世代以降に重点的に防除する。

4 チャハマキ (並)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の巡回調査では発生を認めていない。

[防除上の注意]

- 1) フェロモントラップによる誘殺状況では、都城では4月3～4半旬頃が発蛾最盛期であったと考えられる。
- 2) 本年は防除適期が一番茶の時期と重なり、適期防除が困難であると考えられるので第2世代以降に重点的に防除する。

5 チャノミドリヒメヨコバイ (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率23.1%(平年4.7%)、払落虫数0.6頭(平年0.1頭)は平年より多である。

[防除上の注意]

- 1) 例年、二番茶期から発生が増えてくるので注意する。

6 チャノキイロアザミウマ (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の見取り調査による発生面積率23.1%(平年13.1%)は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- 1) 例年、二番茶期から発生が増えてくるので注意する。

7 ツマグロアオカスミカメ (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率53.8%(平年1.2%)、払落虫数0.9頭(平年0.0頭)は平年より多である。

[防除上の注意]

- 1) 茶以外の植物にも寄生するため、ほ場周りの除草を行う。

8 クワシロカイガラムシ (多)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率76.9%(平年18.7%)は平年より多、寄生株率23.1%(平年8.8%)は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- 1) 第2世代幼虫の防除適期は幼虫ふ化開始から1週間後、または幼虫ふ化最盛期で

あるので、ふ化状況をよく観察し防除する。

- 2) 薬剤散布は量を多めに（10a当たり1,000リットル）、枝幹に十分かかるようにいねいに行う。

その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。
日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>
農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>
農薬検査所ホームページ <http://www.acis.go.jp/>
- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。
特に水質汚濁性農薬ベンゾエピン剤（商品名、マリックス乳剤、粒剤等）は使用しないこと。
- 3 発生量（程度）の区分

多い	（高い）	やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多い	（やや高い）	平年並の外側20%の度数の入る幅
平年並		平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少ない	（やや低い）	平年並の外側20%の度数の入る幅
少ない	（低い）	やや少ないの外側10%の度数の入る幅

（平年値は過去10年間の平均）

4 予察情報の種類

病虫害防除・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。

- 1) 予報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。
- 2) 注意報・・・主要な病虫害の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
- 3) 警報・・・主要な病虫害の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
- 4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病虫害がある時や、病虫害の発生様相が特異な時に発表する。
- 5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病虫害の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

お知らせ (<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>)

病虫害防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。予察情報の根拠となる地域別調査データ、防除対策等を掲載しています。ぜひご利用ください。

【文書取扱】

病虫害防除・肥料検査センター 櫛間
TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-7499
E-mail: byogaichu-hiryo
@pref.miyazaki.lg.jp